

はじめまして、「しゅん」といいます。

この度は僕のプロフィールレポートに、
興味をもってください ありがとうございます。

このレポートでは僕が大学生にしてなぜビジネスを始め、
現在に至るのかについて話をしていこうと思います。

僕はいま大学に通いながらも、

- ・メルマガ、ブログ、などからの情報発信
- ・YouTube へ動画投稿
- ・その他サイト運営

などを中心にビジネスしています

ネットビジネスの世界は、
まじで「自由」そのものです。

パソコン一台あれば、
いつでも、どこでも、いくらでもお金を稼ぐことができます。

僕も、ネットビジネスで月 10 万円程の利益を、
ほぼ自動で出したことがあります。

その時僕は、つまらなかったバイトをやめて、
浮いた時間で、家でブログ書いたり、ゲームしたりしてました。

周りの大学生がシフトをつめこんで、必死こいて稼ぐ程のお金が、
僕は家でゲームしながら勝手に振り込まれるのです。

バイトがないと、精神的にも楽ちんです。

夜遅くまでベロンベロンになるまで、飲もうが、
明日のバイトのする心配しなくて済みます。

風邪をひいたり、究極にやる気がない時でも、
「今日バイトたるすぎる…」なんて思う必要もありません。

自分の時間は、自分のためだけに使えるようになります。

別に社会人でもいっしょですね。

ネットビジネスである程度の収入を得られれば、
会社も別にやめてもいいんですよ。

僕は日本のサラリーマンに対して、
すごいネガティブなイメージを持っています。

毎朝早く起きて、満員電車に乗りながら、
死んだ目のまま通勤する。

そして、好きでもない上司にぐちぐち怒られながら、
ブルーな気持ちで帰宅して1日を終える。

そんな毎日を、定年まで永遠に繰り返すのなんて嫌じゃないですか？

ネットビジネスでお金を稼いでる人の1日は、もっと快適です。

朝はゆっくり起きて、

電車なんか乗らずに、

自宅や近くのカフェでのどかに作業をすることができます。

嫌いな人間と関わる必要も一切ありません。

僕は、ネットビジネスを始めることで、
人生の時間を自分の思いのままに使い、
ストレスなく一瞬、一瞬を楽しく過ごせるようになりました。

そんな僕ですが、
もともとはネットビジネスなんてものとは、
全く無縁の生活をしていました。

別に夢や目標といったものもなく、
同じような毎日をたんたんと過ごす、つまらない人生を送ってきました。

当時大学生だった僕は、
みんなと同じように気楽な大学生活を送り、
みんなと同じように就職をして、
みんなと同じようにサラリーマンとして一生働いていく。

そんなありきたりな人生を送っていくんだらうな〜と、
心の中で思っていました。

それが”普通”だと思っていました。

そんな僕は、ある出会いをきっかけに、
今までの価値観がぶっ壊されビジネスを始めることになります。

それではここから僕の人生をさかのぼって、
幼少期のころから話していこうと思います。

幼少期 単身赴任の父と、学校の先生の母との間に生まれる

自分でいうのもあれだが、

僕は、小さい頃からずっと、

良い意味でも悪い意味でも、“出来の良い子”というかんじだった。

勉強もそこそこできたし、悪ふざけすることもほとんどなかった。

だが、その分、自分の感情を表に出すのが苦手だった。

もっと簡単にいえば、わがままを言えない人間だった。

やれと言われたことは、しっかりやるし、

やるなと言われたことは、やらない。

逆に、“自分のやりたいこと”、

“自分の欲しいもの”を言ったりもしなかった。

我慢するのが得意だった。

周りの人間に合わせていればどうにかなるだろう。

大人の言うことを聞いていればうまくいくはずさ。

そんな価値観をもった子供だった。

僕は 1996 年に、千葉県のとある病院で生まれた。

当時は自覚がなかったが、

比較的裕福な家庭で育った。

というのも、両親は共働きで忙しい人達だったのだ。

その分、僕の幼少期の時間のほとんどは、

保育園のなかで過ごし、

親と過ごす時間が極端に少なかった。

父親は、ばりばりのサラリーマン。

N〇T という超有名な大企業に勤めて、
部長クラスの役職についていた。

当時は、”大企業の部長”がどれほどの偉いのがわからなかったが、
大学生になった今考えると、ものすごい優秀だったんだなと実感する。

そんなエリートな父親だが、
幼少期にいっしょに遊んだ記憶はほとんどない。

なぜなら、父親は単身赴任していたからだ。

タイやフィリピンなど、東南アジアを中心に海外勤務していた。

帰ってくるのは、半年に 1 回くらい。

普段はほとんど家にいないのだ。

そりゃ遊んだ覚えがないはずだ。

母親はベテランの小学校の先生だった。

先生は先生で、クソみたいに忙しい。

まず、先生の朝は早い。

もちろん僕だけ家で1人で寝てるわけにはいかないので、

お母さんと一緒の時間に早起きする。

朝6時くらいには起きていたらしい。

そして、朝7時過ぎには、保育園にぶちこまれる。

もちろん、その時間に他の保育園児たちは、誰一人として来ていない。

朝っぱらから、僕と保育士の先生2人で遊んでいた記憶が、

かすかに残っている。

そして、幼稚園から帰るのは夜7時頃。

それまでずっと、保育園にいる。

父親は単身赴任で、母親は学校の先生。

そりゃ親と接する時間は少ないはずだ。

だから、他の子たちのように、

毎日家族そろって、夕食を食べたり、

毎週のように遊びに出かけたりすることはなかった。

でも、僕はそんな親が家にいない状況に

不満を言ったりはしなかったらしい。

何だかんだ大事に、育ててもらっていたのは、わかっていたし、

お父さんはお父さんなりの事情があって、海外に行っているんだ。

お母さんは学校の先生だから忙しいのは仕方ない。

そんなふうに、“さみしい”、“遊びたい”という気持ちを

押し殺していたのかもしれない。

僕は、保育園児ながら、“我慢する”ということ覚え始めた。

小学校時代 勉強を頑張るゲーム大好き小学生

小学校に入ると、とにかく勉強をやらされるようになる。

お母さんが小学校の先生だったからだろうか、

勉強に関しては、けっこう厳しかった。

英会話の教室に小1のときから入り、毎週通った。

さらに、お母さんが家にいる時は、

家庭教師のように、とても熱心に勉強を教えてくれた。

どこから持ってきたのかわからない、

算数ドリルや漢字ドリルをひたすら解いたり、

学校の宿題を僕が完璧にできるまで、

説明してくれたりした。

そのおかげもあってか、

学校では、完全に”頭の良い、優等生キャラ”になっていた。

クラスでの成績は、ほぼトップだったと思う。

テストはほとんど 100 点満点。

通知表は5がずら一つと並ぶ。

(音楽と図工は苦手だったので、3だったけど笑)

でも、別に勉強が好きだったわけでは無い。

勉強は完全に”やらされていた”。

ほとんど、自主的に勉強したことはない。

「なんで、勉強なんてしなくちゃいけないんだよ...」

そんな声を心のなかにしまいながら、

親の言う通りに勉強していた。

でも、勉強できることを褒められるのは、嬉しかった。

「テストで 100 点なんてすごいね！ やっぱできる子だわ～」と
先生に褒められる。

「どうしたら、そんな頭良くなれんの？」と
同級生に聞かれる。

それだけで、優越感にひたれた。

だから、嫌々ながらも、勉強は頑張れた。

こんなふうに、僕は、勉強ができて、褒められるという経験から、

「大人の言うことは正しいんだ」

「言われたことはしっかり守れば良いことがある」

というふうに思うようになった。

では、勉強以外は何をしていたか？

ほとんど家で1人で遊んでいた。

小学校に入って、父親は単身赴任から帰ってきたが、
それでも両親2人は忙しかったので、
遊びにでかける機会は少なかった。

家で1人でいる時間程、暇なことはない。

そこで、僕は家で1人楽しむことにハマっていった。

ゲーム、漫画、アニメ、等々

僕は、大学生になった今でも、超インドア派だが、
その性格はこの頃から引き継いでいるだろう。

特にゲームにいたっては、尋常じゃないくらいやっていた。

勉強する時以外は、ほとんどゲームに時間を費やしていたと思う。

ドラクエを買えば、ラスボスを倒した後も、

主人公のレベルを 99 になるまで、やり込みまくる。

ポケモンを買えば、四天王を 50 周くらいする。

たまに、友達の家遊びに行く時も、

外で遊ばず、スマブラやったりパワプロやったり、

ゲームさんまだった。

勉強を強制されるなか、良い息抜きになるゲームは、

最高の遊びだった。

だが、ゲームにハマってくると、止まらなくなり、
勉強もおろそかになっていった。

ゲームのせいで、勉強する時間が減ってくるようになったのだ。

それを見かねた母親はゲームの時間を制限させた。

平日は基本ゲームは禁止。

休日は1日1時間まで。

そんなルールが決められていた。

正直、ゲームが生きがだった僕にとっては、
クソほど厳しいルールだった。

俺の楽しみを奪わないでくれ...

ゲームしてる時間が1番楽しいんだ...

そんなふうに思いつつも、

しばらくは我慢していた。

でも1ヶ月もすると、耐えられなくなって、

どうしても、もっとゲームをしたくなった。

そこで親にばれないように、ゲームをするために、

ある作戦を思いついた。

それは、「トイレのなかでゲームする作戦」だ。

「トイレのなかなら、お母さんでも気づかないだろう」

「これで、好き放題ゲームができるぜ！」

めちゃくちゃ浅はかな作戦だ(笑)

そこで僕は、ゲームがやりたくなったら、

その度に、トイレに駆け込んだ。

当時ハマっていたのは、ドラクエだ。

ズボンはずげず、便座に座ったまま、

ニンテンドーDS をカチカチやって、ひたすらモンスターを倒しまくった。

最初は全然親にバレなかった。

まあ、自分の子供がトイレでゲームしているなんて、疑うはずもない。

でも、子供っていうのは愚かなもので、

1 回作戦が成功すると、何回もやりたくなってしまふ。

すると、明らかにトイレに行く頻度、トイレの滞在時間が長くなり、
それが、母親に気づかれるようになる。

「あんた、最近トイレ長くない？」

「いや最近お腹が痛くて...」

そんな会話が繰り返された。

それでもこりずに、トイレでゲーム作戦を続けていた。

するとある日、僕がトイレに行っている間、

ゲームがなくなっていることを、

お母さんに気づかれてしまった。

僕がゲームを終えて、トイレから出ると、

お母さんが僕の部屋で待ち構えていた。

鬼のような形相だった。

「トイレのなかでなにやってたの？(怒)」

あの時の、緊張感と絶望感は今でも覚えている。

「俺の人生終わった」と心の中で思っていた。

その後は想像通り、こっぴどく怒られた。

トイレで、ゲームしたこともそうだが、

僕がお腹が痛いからトイレが長いと嘘をついたことも、

よくなかった。

その2点を徹底的に、問い詰められ、

めちゃくちゃ怒られた。

僕は、わんわん泣いた。

その後1ヶ月位は、ゲームが没収された。

ゲーム一切できなくなり、地獄の生活になってしまった。

今思えば、親のルールを破ってゲームをしたり、

嘘をついたことを叱ってくれたのは、

とてもありがたいことだ。

でも、当時は自分のゲームという、最大の楽しみを失い、

とてつもなく悲しかった。

思えば、このトイレでゲームをやるという行為が

親への最後の反抗だったかもしれない。

それ以降は、怒られるようなことは、ほとんどしなくなった。

きちんと親が言うことを守り、

大人が悪いと思うことはしない。

そうすれば、怒られることもない。

ゲームが没収されることもない(笑)

逆に、頑張れば、大人は褒めてくれる。

大人の言うことは絶対！

そんな価値観で生きていたと思う。

だから、勉強も親や先生に褒められるくらい

必死こいて頑張るようになった。

中学時代 部活と勉強で忙しい中学生

僕の中学生生活は、

勉強と部活に縛られた忙しい毎日だった。

まず、中学校に進学すると同時に

大手の塾に通い始めた。

塾なんて行きたくたかったが、

「大手の塾で勉強した方が、将来のためになる」

と親に言われ、渋々通った。

週3~4回は行かなくてはいけなかった。

宿題も毎週のように、すごい数が出て、

遊ぶ時間よりも、勉強時間のがはるかに多かった。

加えて、部活動もやっていた。

小学校の頃にかじっていた、ソフトテニス部に入った。

毎日朝練のために、朝の6時頃に起きる。

もちろんめちゃくちゃ眠い。

ベッドから無理やり身体を起こす。

そして、急いで朝食を食べて、

ダッシュで学校のテニスコートへ行き、

朝7時からの練習に出る。

その後の学校の授業も、もちろん真面目に受けていた。

正直、学校の授業なんて、塾ですでに予習済みだ。

めちゃくちゃ退屈だった。

なかには、とてつもなくつまらない授業をする人もいた。

ただただ、教科書の内容を朗読するような先生だ。

それでも、しっかり真面目にノートをとっていた。

別に、授業なんて聞かなくても、

成績はたいして変わらなかっただろう。

それでも僕は、

”中学生は、真面目に授業を受けるべき”だと思っていたので、

ただただしっかり授業を聞いていた。

放課後は部活に直行した。

日が暮れるまで、ボールを打ちまくった。

そして、帰宅したらすぐ、塾へ急いだ。

2 時間以上授業を受け、

帰ったら、宿題を少しだけ解いて、

12 時頃倒れるように眠った。

土日も宿題と、部活の練習でほとんど潰れた。

毎日似たような日々が続く。

正直けっこうしんどかった。

毎日の大半の時間が勉強に使われた。

本当は友達ともっと遊んだりしたかった。

周りの友達は、放課後に、

「〇〇の家でモンハンしようぜー！」とか言っている。

超うらやましい。

「俺も、モンハンみんなとやりたいよ～」とか思いながら、

塾でカリカリ勉強していた。

我慢しながら、必死こいてやっていた。

もう一度言うが、僕は、勉強が好きだったわけではない。

でも、“塾”という勉強をやらされる環境にいたから、

とりあえず、勉強していた。

そして”中学生が勉強を頑張る”それは正しいことだと、

信じて疑わなかった。

塾と部活と学校を往復するような、
忙しくも、同じような変わらない毎日を送っていた。

そんな、変わらない日常のなかである事件が起きた。

中学 2 年生の頃だろうか。

僕のクラスでいじめが起きたのだ。

いじめられたのは、控えめな女の子。

僕が班長をやっていた時の班員だった。

ようは、同じグループで活動していた仲間だった。

つまり、机も 2 個くらいしか離れていない。

普段はそれほど、その子としゃべるわけではないが、
けっこう身近なクラスメイトだった。

いじめてたのは、クラスのウェイウェイしてる男子グループ。

悪い奴らじゃないが、
調子に乗ると止まらない、少しアホなやつらの集まりだった。

別に陰湿で無視するようないじめじゃなかった。

最初は、その女の子にちょっかいかけて、
いじっている程度だったが、だんだんエスカレートしていった。

「よー！○○！」とか言いながら、肩を思いっきり叩いたり、
その子の給食にいたずらしたりしていた。

最悪だったのは、給食中にグレープフルーツとスープが出た時だ。

そのいじめるやつらは、

その子のグレープフルーツをスープにぶち込んで、

ケラケラ笑っていた。

最低だ。

そして、その女の子がいじめられている時、

僕は何をしていたか？

何もしていなかった。

もちろん、いじめを注意したくても、

自分がいじめの対象になるのが怖くて、

注意できなかったという人はけっこういるだろう。

でも、僕は違った。

ただただ、いじめを傍観しているだけだった。

多分、その子がいじめられているという感覚はなんとなくあったと思う。

でも、「俺には関係ないか...」と、見てみぬふりをしていた。

同じ班でいっしょに活動していて、

席もかなり近くにいるにも関わらずだ。

本当なら、注意するべきだった。

本当なら、先生に言うべきだった。

本当なら、いじめられている子に声を少しでもかけるべきだった。

僕はこの頃、心に余裕がなかった。

勉強、勉強、勉強、部活、部活、勉強、、、

「俺は自分のことで忙しい。」

「俺は他の子はかまってる暇はない」

今思えば、忙しいなんて、くだらない言い訳にしかならない。

僕は、当時勉強や部活を中学生活の中心だと思っていた。

でも、いじめの問題や人間関係は

勉強や部活よりももっと大切なことだ。

ないがしろにしていいはずなんてなかった。

結局そのいじめの問題は、クラス会議になって、

先生の注意によって解決した。

いじめてたやつらは、坊主になっていた。

でも、僕にとっては、

「あの時、自分には何かできなかったのか？」と、

一生悔いに残る事件となった。

僕が自分のやるべきことをやっていればいい。

部活、勉強を頑張る。

それが僕の務めだ。

言われたことをやる、決められたことをやる。

今思うと、中学時代は、ただ命令された通りに動く、

マシンのような冷たい心だったかもしれない。

高校時代 部活に打ち込む高校生

高校に入ると、中学時代の勉強がみのり、
偏差値 70 以上の高校に進学した。

高校では僕より頭良いやつやが、ゴロゴロいた。

東大目指しているやつもそれなりにいたし、
実際、東大に受かるやつもいた。

まして、早稲田、慶應なんてうじゃうじゃいる環境だった。

中学時代までは、“勉強”でクラスのみんなや先生に良い顔ができたが、
高校入ったら、全く通用しなくなっていた。

「こいつには、絶対勉強じゃ勝てない...」

そんなやつらばかりだった。

そんな優等生が周りにうじゃうじゃいるなか、

僕は勉強をほどほどにして、

高校時代は部活をひたすら頑張った。

部活は、中学と同様に、ソフトテニスが続けた。

正直、練習は、中学の比にならないくらいきつかった。

その部活では、“インターハイに出場する”という、

なかなか立派な目標をかかっていた。

だから、その分練習も、ハードだった。

もちろん、毎日、日が暮れるまで練習し、

土日もつぶれた。

なかでも、1番しんどかったのが、“夏合宿”という、

夏休み恒例の、イベントだ。

普段の練習はテニスが上達するような、
工夫されたメニューをこなしていく。

しかし、夏合宿は伝統的に、
”自分の身体をいじめる”ような練習ばかりだった。

しかも真夏の、30度を超えるような猛暑のなかでだ。

練習内容は、とにかく走って走って、走りまくる。

まず、毎朝6時に起きてランニングをする。

3～4キロは走っただろう。

その時点で朝はなんとなく気持ち悪くなってくる。

その後は朝食を食べるが、吐き気で喉を通らない。

そしてそこから1日中練習だ。

真夏の炎天下のなか、テニスコートを上下左右に走らされ、
足がぶっ壊れるくらいまで、ひたすら続ける。

だんだん意識がもうろうとしてくるし、
練習中何度も吐きそうになる。

実際吐く人もいる。

「俺は、何のためにこんなきついことやっているんだろう...」
そんなふうに思って、挫折しそうになることは何度もあった。

日が暮れた後も、もちろん練習は続く。

体育館を借りて、そこでボールを打ったり、
ランニングをしたりする。

僕は、このランニングで1回過呼吸になった。

体育館を100週くらい走り終わった後に、
ゴールをすると、そのまま倒れこんだ。

過呼吸になったことがある人ならわかるかもしれないが、
まじで、呼吸が異常に速くなる。

ハアハア言いながら、体育館の片隅でぶっ倒れていた。

「しんどい…。もう走りたくない…」

何度思ったことかわからない。

まじで、この合宿中だけは、何度も部活をやめたくなった。

だが、夏合宿がきつくて、部活をやめるようなメンバーは、

結局 1 人もいなかった。

それは、インターハイに出るという明確な目標があったかもしれないし、

チームとしての一体感があったからかもしれない。

それでも、あれだけつらい練習を耐えながら、

努力するのは素晴らしいと思う。

だから、僕は高校時代部活を頑張れたことを誇りに思うし、

ソフトテニスというスポーツも、

部活をいっしょにやった仲間も好きだった。

大学時代 死ぬほど退屈な大学生活

大学へ入ると、きつい勉強や部活からは解放された。

思えば、高校時代までは、

勉強や部活でめちゃくちゃ時間を奪われていた。

でも、大学では、親から勉強をやれやれ口うるさく言われることもないし。

部活も普通の大学生は入らない。

だから、僕は大学時代は勉強もしなかったし、

きつい部活にも入らなかった。

僕は大学生になって初めて、

ある程度自分の自由な時間が確保されたのだ。

「大学生になったら、遊びまくってやるぞー！」

「バイトも一生懸命やって、いろんな経験をしたい！」

大学入学する直前は、そんなふうに思っていた。

実際、大学生活も最初は楽しかった。

サークルの飲み会に行って、夜遅くまで遊ぶ経験をしたり、

友達の家で1日中ゲームしてわいわい騒いでいたこともあった。

大学の授業、サークル、飲み会、バイト。

そこには、僕が今まで全く経験したことのない、

新鮮な世界が広がっていた。

だけど、6月、7月くらいになってくると、

急に大学生活に飽きるようになる。

飲み会も最初はあの空気感が楽しかったが、
結局、友達どうしでお酒飲んでしゃべるだけだ。

授業の単位の話、サークル活動の話、バイトの話、〇〇が付き合ったみ
たいな恋愛話

こんな同じような話を永遠にしていた。

全く生産性はない。

僕は、もともとコミュ障で、飲み会の場がそこまで得意じゃなかったのに、
飽きてくると、飲み会にはほとんど行かなくなってしまった。

そうして、遊ぶ日も減っていき、
だんだん、大学生活が退屈になってきた。

僕は、大学生になって、部活や勉強から解放されて、
楽しく充実した生活を送れると思っていた。

しかし、実際には真逆だった。

全く刺激のない、つまらない毎日になってしまった。

「こんなはずじゃなかったのに...」

「大学生になって、自由を謳歌できると思っていたのに...」

そんな気持ちがぐるぐる心の中で回りながら、
大学生活を送ることになった。

そして、だんだん生活習慣は”クズの極み”になっていった。

僕は、小学校時代からゲームが大好きだった。

だから、やることがなくて、暇だった僕は、

1日中、ゲームやネットをして過ごすようになった。

夜遅くまでゲームをして、明け方に寝て、昼頃起きる。

こんなことは日常茶飯事だった。

授業もサボることが多く、家出ることが少なくなった。

もう引きこもりみたいなものだ。

今考えると、つまらない毎日だった。

もちろん、家でゲームしたり、ゴロゴロするのは嫌いじゃない。

ゲームは基本的に楽しいし、何より楽だ。

でもそれらが、

「自分の本当にやりたいことか？」

「めちゃくちゃ楽しいことか？」

そう言われると多分そんなことはない。

ただただ遊んで、ぐだぐだしていても、

“人生充実している感“が全くなかった。

なんか物足りない毎日をすごしていた。

高校時代はまだ、

勉強や部活といった頑張れるものがあったから良かったかもしれない。

大会で勝つ。受験に合格する。

きつかったが、毎日目標に向かって努力していた。

でも、僕は大学生になって、自由な時間と引き換えに、

”頑張れること”もなくなってしまった。

そして、僕は内心、

そんなクソみたいな生活をしている自分が嫌いになった。

自分が本当にしたいことは何かを考えず、

なんとなく、めんどくさそうなことは遠ざけながら、

周りの環境に流されるままの人生を送る。

そんな人生めちゃくちゃつまらなくないか？

もっと、自分の気持に正直になって、

やりたいことをやっていくべきなんじゃないか？

そんな気持ちになってきた。

今思えば、僕の学生時代、

周りの人間や環境に流され続けていた。

小学校の頃から勉強はしっかり頑張っていたが、

全く勉強は好きではなかった。

ただ、親や塾の先生に、

「勉強は将来のために頑張れ」

「宿題はしっかりやってこい」

と指導されてきた。

だから僕は、ただただその言葉に従っていた。

大学でグダグダな生活をしていた時もそうだ。

ゲームは好きだったが、

貴重な大学時代の自由な時間を使ってまで、

本気でやりたかったことではない。

楽で、多少なりとも時間つぶしにはなったからやっていただけだ。

思えば僕は自分の人生のなかで、

自分から本気で「これがやりたい！」と思って行動したことは、

なかったかもしれない。

今まで、

「本当に“自分のやりたいこと”をやってきたか？」

「“やりたくないこと”なのに、やるのが普通だと思って、やってきたんじゃないか？」

「もっと楽しいことがあるはずなのに、“なんとなく周りに流されるまま”、生きてきたんじゃないか？」

そんな、自分の思いが、かけめぐるようになった。

僕はこのまま、なあなあでつまらない人生を送るとどうなるだろうか？

別に、やりたくないのに就職活動をし、

別に、働きたくない職場に就き、

別に、好きでもない会社の上司のもとで

別に、やりたくない仕事を定年まで続け

本当にやりたいことに、出会えず、

”気づいたら人生が終わっている”

「さすがに、そんな人生ってさびしくね？」

そんなふうに考えると、

「もっと、自由で充実した生活を送りたい。」

「本気で自分のやりたいこを見つけない。」

そんな思いが強くなった。

大学時代のクソな生活をしてきた自分を変えたくなくなったのだ。

ネットビジネスとの出会い

僕は、大学生になって初めて、
周りの人や環境に流されることなく、
「本気で自分のやりたいこと」を見つけようと思った。

そんな時なんとなく、ネットサーフィンをしていると、
”ネットビジネスで1億円稼いで自由になった”
という人のブログを見かけた。

なんか怪しいなと思いつつ、その人のブログを眺めてみた。

すると、その人のプロフィールには、
驚きの経歴が書いてあった。

- ・もともと超貧乏だった
- ・でもネットビジネス始めたら、半年くらいで、月収 100 万突破
- ・今は、何もせずに月収 1000 万
- ・働く必要がないので、趣味に没頭

「え、月に 1000 万??????」

「年収じゃなくて？(年収でも凄いけど)」

「しかも何もせず？」

「今、働いてないの????？」

「俺なんて、死ぬ気でバイトして、月 10 万よ？」

まあ、最初は信じていなかった。

これはあれだろ？よくある詐欺だろ？

働かずにお金なんて稼げるわけないやん...

僕の常識とはあまりにかけ離れていた。

でも、僕の常識とはかけ離れているからこそ、
なんとなく興味がでてきた。

この人の経歴が真実だとしたら、
この人こそ、自分の理想の生き方をしていると思った。

とても自由で、充実した毎日を送っているように見えたからだ。

そして、“お金をとてつもなく稼ぐ”

それじたいがとてもカッコよく見えた。

何より、僕もネットビジネスというものを始めれば、
退屈で刺激の少ない日常から抜け出せるかもしれない。

レールの敷かれた人生からは、おさらばできるんじゃないか？

そんな思いで、勇気を振り絞って、
その人のメルマガに登録した。

そして、その後は、ネットビジネスについて調べまくった。

なるほど、アフィリエイトってもので稼いでるのか。

商品を紹介すれば、お金がもらえる。

確かにリスクは低くて、稼げそう。

しかも、ちゃんとしたビジネスなのか。

知らなかっただけで、そんな怪しくもない？

もしかしたら、俺にもできるんじゃないか？

こんなふうに、自分でいろいろ調べたり、
この人のメルマガを読むうちに、
僕のネットビジネスに対する好奇心はマックスになった！

学校の勉強と違って、
ネットビジネスについて、調べたり、学んだりするのが、
めっちゃくちゃ楽しかった。

なんたって、ネットビジネスを学べば、
めっちゃお金稼げるかもしれないんだから！

嫌々勉強をやってきた僕だったが、
初めて、学ぶことが楽しいと感じた。

その後、興味は確信に変わり、
ネットビジネスで稼いでみようと本気で思うようになった。

ネットビジネスで成功すれば、

自分の思うがままに自由に生きることができる。

もう、毎日同じことを繰り返すような生産性のない毎日から抜け出して、

充実した人生を送れるかもしれない。

そんな思いをもっていた僕には、

ネットビジネスの世界は本当に魅力的だった。

最初はわからんことだらけだった。

いろんな手法にも手を出した。

でも始めて、数ヶ月後には、

月 10 万円程のお金が銀行に振り込まれていました。

最初は怪しいと思っていたネットビジネスも、
少しでも稼げるようになると、クソ楽しかった。

頑張れば頑張った分だけ、お金が入ってくる。

とても刺激的な毎日だ。

そして、何より夢がある。

ネットビジネスは、個人でも、
年収数千万円とかいう金額が狙える世界だ。

どんなに頭が良くて、優秀な人でも、
会社員になってしまったら、なかなかそこまでは稼げない。

常識では考えられない稼ぎ方だ。

こうして僕のルールに敷かれた人生は、終わりを告げた。

ただただ、大人の言うことに従うのもやめて、
自分が本気で頑張れることも見つかった。

僕の人生は、ネットビジネスで変わった。

毎日ダラダラ過ごすこともなくなった。

ゲームをしている時間より、
ビジネスやっている時間のほうが刺激的で楽しかったからだ。

ネットビジネスの世界は新しいことだらけだ。

知れば知るほど、もっと学びたいと思える。

学べば学ぶほど、もっと実践してみたいと思える。

僕の今までの人生には、これほどまで、
「本気で頑張りたい」と思えたことはなかった。

周りの人間に流され続けて、
つまらない人生を送っていた僕が、

ネットビジネスという新しい世界に出会うことで、
毎日、充実した生活を送れるようになった。

これからも、僕はネットビジネスを使って、
自分の思うがままに、自由に生きていきたいと思う。

ここまで、長いレポートを読んでいただきありがとうございました。

僕はネットビジネスを始める前の、

ただただ、大人の言うことを聞き、

周りの人間に合わせて生きる自分が嫌いでした。

だから、このレポートも過去のダメな自分を認めるのが嫌で、

書きたくないという気持ちも強かったです。

でも、自分の素直な気持ちと向き合う良い機会になりました。

感情をさらけ出しているので、

”同級生にでも見られたら”、と思うと超恥ずかしいですが、

まあ、その時はその時です(笑)

このレポートを書いたことは後悔していません。

僕はビジネスを始めることで、本当に人生が変わりました。

なんとなくつまらない毎日を過ごしていた人生が、
一気に刺激的なものになりました。

本気で頑張れることを見つけ、
楽しく充実した日々をすごせるようになったのです。

これからも、ネットビジネスという新しい世界に刺激を受けながら、
僕の知識や経験をどんどん発信していきたいと思います。

ありがとうございました。

このレポートでは、僕の人生を振り返ってきましたが、
メルマガでは“ビジネス“や”実際にお金を稼ぐこと“に関する、
もっと深い情報を発信しています。

いつでも登録解除できるので、
良かったら登録してみてください。

<http://shun001.com/lplp/>

